早稲田大学ふくしま浜通り未来創造リサーチセンター

第8回創造的復興研究会 議事録

日時：2023年11月16日（木）18:00-20:00

方式：Zoom

参加者：22名

研究会メンバー（敬称略）：

研究会代表

松岡俊二：早稲田大学大学院アジア太平洋研究科・教授

研究会副代表

林 誠二：国立環境研究所福島地域協働研究拠点・研究グループ長

小野田弘士：早稲田大学大学院環境・エネルギー研究科・教授

研究会メンバー

高原耕平：ひょうご震災記念21世紀研究機構 人と防災未来センター・主任研究員（報告者）

小磯匡大：福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校教諭（報告者）

除本理史：大阪市立大学大学院経営学研究科・教授（討論者）

辻 岳史：国立環境研究所福島地域協働研究拠点・主任研究員

戸川卓哉：国立環境研究所福島地域協働研究拠点・主任研究員

遠藤秀文：株式会社ふたば・社長、福島県富岡町

島田 剛：明治大学情報コミュニケーション学部・教授

豊田利久：神戸大学・名誉教授

永井祐二：早稲田大学環境総合研究センター・研究院教授

李 洸昊：早稲田大学大学院環境・エネルギー研究科・講師

（欠席メンバー）

林 裕文：福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校教諭

岡田久典：早稲田大学環境総合研究センター・上級研究員

小松和真：福島県広野町復興企画課・課長

南郷市兵：福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校副校長

阪本真由美：兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科・教授

佐藤亜紀：HAMADOORI 13 事務局長

佐々木俊介：早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター・講師

吉田 学：HAMADOORI 13・代表、株式会社タイズスタイル・代表取締役、福島県大熊町

洪 恒夫：東京大学総合研究博物館・特任教授

大和田徹：福島県広野町復興企画課企画振興係・主任主査

池辺 靖：日本科学未来館科学コミュニケーション専門主任

高垣慶太：早稲田大学社会科学部・2年

オブザーバー：

崎田裕子：NPO 法人・持続可能な社会をつくる元気ネット・前理事長

菅波香織：未来会議・事務局長

力丸祥子：朝日新聞
林 美帆：公益財団法人水島地域環境再生財団研究員
溝上伸也：東京電力
小林正明：中間貯蔵・環境安全事業株式会社・前社長

討論者

除本理史：大阪市立大学大学院経営学研究科・教授

事務局

飯島 聰：早稲田大学レジリエンス研究所招聘研究員
朱 鈺：早稲田大学大学院アジア太平洋研究科・博士課程
任 羽佳：早稲田大学大学院アジア太平洋研究科・博士課程

司会：小野田弘士（副代表）

講演「福島県浜通り地域住民の生活史における複合災害の集合的外傷と回復」

高原耕平：創造的復興研究会・文化班主査、人と防災未来センター・主任研究員

小磯匡大：創造的復興研究会、ふたば未来学園・教諭

（報告内容は報告資料を参照ください）

【質疑・総合討論】（研究会は研究会メンバーの発言、オブザーバーはオブザーバー出席者の発言です）

除本：私から3点のコメントがある。まず、自身が体験したコレクティブ・トラウマのことを話したい。2つ目は、単位集団の規模の問題である。

報告に、福島とバッファロークリークとの比較があったが、両者は地理的な規模が大きく違う。どのレベルまで細分化して見るのかが重要である。私自身の経験では、各レベルの行政区の規模に対応するような各種の団体や組合の機能も大事であり、そういう単位を想定して分析する必要があると感じた。

コネクティブ・トラウマの回復について、自分の経験したケースで言えば、今年の1月、いわき市で「公害資料館連携フォーラム in 福島」プレ企画を行った。しかし、福島原発事故を公害問題として捉えることに対しては、福島の方からいろいろな反応が出た。特に、外部の研究者によるそうした性格規定に対する不満が大きかった。これは、公害問題の定義問題ではなく、福島の人たちは自分たちの主導権が失われ、外部の力が大きく作用してきたことが原因であろう。

なお、岡山県の水島コンビナートの大気汚染からの地域再生に関わっており、物語の再構築を通じて地域における分断の修復を試みている。水嶋地域では高度成長期のコンビナート開発で大気汚染公害があつて、裁判を経てから加害企業と患者が和解し、まちづくりへ移行したという経緯があつた。しかし、地域社会ではまだ温度差があり、分断構造もある。私は分断の修復のために、被害者団体のNPO活動に参加している。例えば、地域の歴史を多様な立場の住民が語り合い、それを冊子にまとめるという活動がある。こうした活動によって、地域の歴史における自分の立ち位置を再確認し、公害の歴史と自分の関わりを多様な立場から捉え直してもらうようにしている。

福島では集団訴訟がまだ進行中であり、水島のケースとどこまで比較できるかわからないが、自分と地域との関係を繋ぎ直す物語を再度作ることを有効な手段として提案したい。

高原：対象とすべき単位集団の規模については、掴みかねている部分がある。単位を狭めると話が具体的・現実的になっていくが、個別性を超越した普遍性のある価値がなくなってしまうだろうと思った。福島浜通り地域の多くの調査では、町と町との比較がやられているようだ。単位集団が狭すぎると、そ

の比較・優劣付けの構造から脱出ができなくなる。広い視点と狭い視点をどう重ね合わせるのかが課題である。

『水島メモリーズ』の福島バージョンはおそらくいろいろなところで作られ始めているだろう。そこでもう1つ気になるのは、復興・再開発のスピードとの兼ね合いである。大熊の図書館解体が一例だが、何かを思い出して個人のストーリーと繋ぎ直すなら、最初の手掛かりになるのはやはり物理的なものや風景である。こうしたものが失われていく中でどうするのが、今後の課題となるだろう。

小磯：双葉郡の多くの調査研究は、確かに町と町との比較がなされている。また、除本先生の話にあったが、福島を公害問題へ分類することも、確かに違和感がある。なぜ、公害問題に分類されることに納得しないかと言えば、自分たちが経験したことが、歴史的・世界的に未曾有のことであるという気持ちが強くあると推察される。思えば、原発立地も含め、コミュニティセンターを建てたり、サッカー場を建てたりすることは、すべて上から与えられた「大きな物語」である。これはある意味で、昔のイギリスの帝国主義政策と似ていて、地域に分断政策が課され、なかなか一つにまとまれない。みんなで次の新しいストーリーを考えられない。原発事故以来12年経ったが、水素やゼロカーボンなどまた上から新しい物語が与えられている。しかし、地域社会の人々はどうしたいのだろうか。長い間、我々はずっと自分が「こういう社会にしたい」という思いを持つことが苦手だったが、起こったことを対処療法的にブリコラージュ的に対応することはできなくはないように思う。

除本：福島の状況を一言で俯瞰して語ることは難しい。単純化したり、性格規定をしたりしても、地域が納得しない。どのように福島の復興を進めるのか、やはりボトムアップ型の合意形成プロセスが大事である。高原先生が言ったように、現状と国の政策とはスピードのギャップが出ている。後から取り返しがつかない可能性があるので、かつての地域社会の姿が浮かび上がるような、物理的な手掛かりや記録の保存が必要である。

オブザーバー：私はどちらかというと、被害地にいる人である。公害地域ではよく、地域再生のやり方をめぐってものがくことが多いが、今日多くの方が話を聞きに来られること自体は非常にありがたい。外からは策士的な研究も時にはあるが、それでも、やはり外部の人と対話をしないと、気持ちは言語化されないままで、トラウマが深化していくことになる。例えば、今、水島の公害のことは聞いてもらえず、トラウマが深い傷になり、分断も固定化している。世間的にも忘れ去られている状態である。日本には水俣病や足尾銅山、イタイイタイ病などの公害問題があったが、それらの経験を生かしてより良い社会を作っていこうということがなくて、とても残念に思う。だから、福島原発事故の後、各地の公害地域の人は、また同じようなことが起こってしまったことを後悔している。地域の主導権の握れなさを辛く感じている。

コレクティブ・トラウマに関して、私が感じるのは声が届かないことによる傷つきである。社会の不協和音と思われ、私たちの声がないものにされる。ジェンダー問題の構造とよく似ている。回復とは前の状態に戻るという意味もあれば、問題を解決して社会を変えるという意味もある。声が消されないことが、社会を変えることや福島復興にとって非常に重要である。

高原：起きたことを「無かったことにする」ことが、いろいろな分野でみられる共通の圧力である。それに対抗するのはなかなか難しい。なかったことにされる声、炭鉱に埋もれて聞こえなくなった声、実は多くあるはずなのに、表面的な繁栄の下に埋もれて聞こえない。それに気づかないでいれば、表面的な成功がある種約束されたようになる。結局変わらないままなのか、全部ひっくり返ってしまうのか、などと時に思ったりする。

なお、聞きに来ることが大事なのだということは自分も大切にしたい。異人として外部から来て、お話を聞く。それを読める形で積み重ねることを自分の仕事として自己規定している。

小磯：復旧するか、社会を変えるかという話があった。原発事故でコミュニティがなくなってしまった。一般的には、5、6年経ったら引っ越したところで新しいコミュニティができると言われている。その後、昔のコミュニティの復活が相当難しくなる。本校（ふたば未来学園）は、双葉郡にあった5つの学校が休校に追い込まれたから、新しく創設された学校である。本校の創設は変わってしまった世の中を生き抜いていくには、教育も変える必要があるという理念であり、「変革者たれ」がテーマになっている。そこに勤めている私も、昔の時代に戻るより、社会を変えていく力を持つ人材を育てたいと考えている。復旧が事実上無理だったら、ポジティブな意味で新しい双葉郡を作っていくことが重要だと考える。

研究会：2点、伺いたい。1つは、浜通り地域のコミュニティを表象する語りは、原発事故の前後から今まで断絶しているのか。原発事故前のある種のコミュニティを表象する語りとして、いわゆるドミナントストーリーのようなものは「原発との共存共栄」だったと思うが、原発事故の後、復興の進め方や地域の将来像などの語りがなかなか見えない。これはどう解釈したらいいのだろうか。例えば、私が調査した女川町では、新しい女川に生まれ変わるといったスローガンが掲げられている。なぜ浜通り地域はこうしたスローガンが出てこないのだろうか。被災者がコミュニティから切り離されていて、自然や環境からも切り離されていることが背景にあるのだろうか。それとも、復興過程での社会的分断が原因なのか。あるいは、復興の意思決定に参画できていないからなのだろうか。

2つ目、除本先生のコメントにあった小さな物語について、それを育てる社会的仕組みをどう作ればよいのだろうか。除本先生から地域の歴史を掘り起こすというアプローチが紹介されていたが、福島にとって原発事故はまだ歴史ではないから、公害地域とはやはり違うのだと思う。原発事故を過去の歴史として捉え直せる時期まで待たないといけないのだろうか。今の時点では、小さな物語を育てる社会的な仕組みは構想しうるように思う。これについて、高原先生の見解を聞きたい。

高原：1つ目は、わからないと言うのが正直なところである。できない理由はたくさんあると考える。上から大きなものが降ってくる構造も原因だろうし、町と町との競争や比較もあるだろう。そもそも、物理的に集まって交流できる機会づくりが難しい。

2つ目の質問への答えも1番目と重なるかもしれないが、「聞く」という何かが無い……。聞き手がいて語り手が生まれる。しかし、現状では、語り手になってほしい人が聞き手に回されてしまっている。聞き手になるべき主体が語り手になってしまっているという構造。小さな物語も大きな物語も、人が話そうとしてる際、その雰囲気醸し出す。その産毛の抱きとめ方は丁寧なものが必要で、「はい用意しました、はいどうぞ！」ではダメだし、ちゃんと語る仕草をしなければ語る資格が無いというのでダメ。自分も含め、聞き方を積み重ねる必要がある。

研究会：集まって語ってもらおうアプローチの必要性はとてもわかる。ただ、育てることについて、外部の研究者はどこまで関わるべきなのか、あるいは見守るべきなのだろうか、改めて思った。

オブザーバー：コレクティブ・トラウマは移住者も含めて抱えているのか。1F 廃炉の行末も決まっていないうし、処理水の問題をめぐるでも、決定過程への手の届かなさを感じている。だからこそ、専門家がいるとしても、地域社会の中で1F 廃炉をどう位置付けるか、そして、歯を食いし張って復興しようとしている人がどう関わるのか、これらの問題をよく考える必要がある。そうすると、コレクティブ・ト

ラウマは、原発事故で被災したということだけでなく、今起きている原発をめぐる諸問題や、一緒に暮らしている人、復興に携わっている人も抱えている問題である。

高原：カイ・エリクソンの本にはそれについての話はないので、個人的な考えを話す。共感や共振が起こりうるのではと思う。集合的 (collective) でなく、個別的 (individual) なトラウマの場合、自身はそれを持っていなくても、それを抱える方といっしょにいと、直接開示されなくても感受性がスイッチされることはわりとある。すると、たとえば移住者も、もともと感じていたことを移住先で感じ取ったり、あるいはもともとそういったものを持っているからこそ傷ついた土地に入っていくこともあるかもしれない。ただ、シビアな体験を持っている人に、簡単に「私もそうです！」というと軋轢が起きるかもしれない。共振が起きつつ、それを言語化することの難しさがある。

オブザーバー：私は東京ベースにしなが、浜通りの復興の応援のために福島まで足を運んだりしている。今、浜通りでは昔の自治会活動を取り戻そうとしている地域が増えている気がする。また、避難されている方がまだ多いので、昔から住んできた方、帰った方、新しく移住してきた方が町を構成している。そういう町で人々は自分たちの暮らしをどう作っていくのか、今日のお話は大事な視点を提供してくれた。これから、外から来た人と一緒に町づくりをする新しい時代がやってくるのではと考えている。私は浜通りにおける復興プロジェクトを起こしたい人を応援するようなプロジェクトに関わっている。2年前は地域で昔から住んでいた方が頑張るプロジェクトが多かったが、今年に入ってから、外から入ってきて、新しい暮らしを作りたい、事業を始めたい人が急増している。このようなみんなと一緒に新しい地域を作る時期を、どういう視点でみるのかが大事である。

高原：今日の報告にあった A さんが同じことを考えている。帰ってくる方と、思いを持って外から新しく来た方をどうインテグレーションするか。以前からの方にも移住者にも効くコンセプトや「軸」が必要である。それが無ければ、どちらかに上書きされてしまう。ただ、そのようにうまくゆくコンセプトって何なのだろうと A さんも悩んでいるし、私も難しいなと思う。

オブザーバー：もともと住んできた方と新しい人たちが新しい地域社会を作っていくには、地域の歴史や文化を共有することが必要である。そのための場ができるといい。

研究会：最近、浜通りに行った際に、悩んでいる点と前向きに捉えたい点を感じた。悩むのは、浜通りは他の被災地と比べ、地域から外に出ることに対してお金を渡すことである。他の被災地は戻って住み直すことに対して補助金を渡しているが、浜通りは全然違う。広野町はそれほど大きな金額ではないが、戻ってきて再考することにインセンティブはあるが、そうではない町では、どういうインセンティブで人に戻ってもらうのか。その点は分けて考えたほうがいいと思う。

前向きなことについて、最近『姪のメイ』という浜通りを舞台にしたテレビドラマを観ている。その中で、福島に関して「福島浜通りは田舎でなく、フロンティアなんだ」と話していた。福島のことをかわいそうに思わないでくれと言った地元の人もいた。結構、前向きな話であり、違うフェーズにそろそろきているのかなと感じた。

ただ、福島のお金の使い方がやはり社会から疑問をもたれることが多い。あそこで何かやればお金がもらえると安易に思う人も多い。とても悲しく思う。

高原：今回の報告の分析はやはり弱いところがあると思うので、これで終わりではなく、これからも考

え続けたい。

小磯：辻先生が話した「帰ろう」のようなスローガンは確かに地域にはないが、それはたぶん帰るべき里山的環境感が失われているからだと思う。大熊町や双葉町、浪江町の人々は、この気持ちであろう。

【研究会代表・松岡の第8回研究会への感想メール(2023/11/17 11:26)】

1. 福島におけるCTの単位集団をどのように考えたらよいのか。バッファローパークのCT事例より、福島・原子力災害の影響範囲は空間的にも人口的にもはるかに大きく、このことが福島のCTの把握を難しくしているのではないかと考えています。
2. 外部の研究者・専門家の福島のCT研究への関与の仕方をどのように考えるのか。外部から福島の災害を「公害」や「複合災害」と名付ける（決めつける）ことに対する、地域社会からのリアクションは現在も強くあります。なお、私自身は「複合災害」という言葉には違和感があり、福島ではあまり使わないようにしてきました。およそ、あらゆる災害は複合災害であり、複合災害といったところで福島災害の特性や特徴が明確にはならないと考えてきました。そのため、福島では、やはり「原子力災害」という言葉を使用する方がよいのではないかと考えています。
3. TCからの回復や地域再生のストーリーを、地域社会の中から共創していくことの重要性。この点は、高原報告の結論部分の、「回復の萌芽は?」、「『軸』を探し始めてる」、「物語の再構築」と重なることです。高原さんは、Aさんの「語り」から、CT状況からの回復には「尖った部分」「コンセプト」「方向性」が必要というとても重要な認識を導き出しています。それでは、TCからの回復や地域再生やまちづくりにおける「尖った部分」「コンセプト」「方向性」とは何かが問われますが、Aさんは「明確には言えない」「そこは決まってないからまだ言えない」という模索の状況を語ることで終わっています。

昨日の高原・小磯報告の参考文献であった天童荒太『迷子のままで』新潮社、2020年に収録されている「迷子のままで」は、児童虐待を扱った作品です。虐待の連鎖の中で親になれないまま、迷子のまま、彷徨う主人公や関係者のあり方に、とても「やるせなさ」や「もやもや」感が強く残る作品です。

もう一つの「いまから帰ります」は、私の好きな作品です。福島除染作業員が主人公で、戦前の映画監督の伊丹万作の戦争責任に関する言葉「だまされるということ自体が一つの悪である」というメッセージを、福島浜通りの人々へ伝えたいという強い思いで書かれた作品です（と個人的に考えています）。

天童荒太『迷子のままで』は、昨日の高原・小磯報告における福島・原子力災害をめぐる人々のCT（の一面）を描いたとても良い作品です。好き嫌いは大きく分かれると思いますが、是非、ご一読ください。

以上